

ひがしの子

令和5年7月3日
岐阜市立岐阜東幼稚園
園長 藤井 佐由美

家庭教育学級にご参加くださりましてありがとうございました！

第1回家庭教育学級「園長講話」では、子どもたちの魅力など、伝えたいことが多くあり過ぎて、盛沢山になってしまいました。最後までお付き合いいただき本当にありがとうございました。

年中児の「生き物の飼い方やさん」について少し、深めて考えたいと思います。

先日のネットニュースで、茨城県結城市の市立保育園の生き物のずさんな管理について、保護者が市に告発した記事がありました。記事内容が真実だとすれば、確かにこの保育園では、泥団子に生き物を入れて投げつけたりしているの、行き過ぎた実態とも思えます。そして園長先生が、「幼児は（中略）生き物をおもちゃにして遊ぶことが大事…」のようなコメントを出しており、理解されにくい言葉であるとも感じます。

ただ、子どもにとって生き物との出会い方は、「大切なもの」という認識から始まるわけではなく、「動いているものを不思議に思う（中には怖いと思う子どももいる）」、「動いているものを捕まえたい」などの気持ちが大きいかな…と思います。

そのため、子どもにとって生き物が「大切なもの」となっていく過程では、生き物と十分に「触れ合う」経験が大切だと考えます。特に3歳児では、生と死を理解して触れ合うわけではないので、時に意図せず命を奪ってしまうこともあります。足を引っ張ってみて、それでも動いている虫を見て不思議に思っていることもあります。また、自分と同一視して、生き物もお風呂に入ったり、ベッドで寝たりするものと真剣に思っている子どももいます。4歳児であっても、すぐに「大切だから正しく飼育しよう」という気持ちが育つわけではなく、触れ合う中で「今ここにいるこの生き物」に心を寄せるようになるという訳です。

実際、なつめ組の子どもたちも、5月頃までは捕まえることが楽しくて、一人一人が虫取り網を持って、チョウを追いかけて回していました。勢いよく網を振りかざし中で絡まったチョウを取り出す指先の力のコントロールがうまくいかず、2本の指で取り出したころには、チョウがグッタリしているなんてこともありました。運よく上手に捕まえることができたとしても、その後の観察や飼育にはあまり興味を示さず、飼育ケースの中に置いたままということもありました。カエルやザリガニも同様でした。家庭や道で捕まえて持ってきて、



すぐに大切に飼育しようとする姿につながる訳ではなく、少しの間見たら終わりといった様子でした。そこで、飼育ケースの中に入れておくだけではなく、カエルやザリガニを大きなタライに入れて、触ってみるという経験ができるようにしたところ、(生き物からしたら迷惑な行為であり、おもちゃにしていると言われると心が痛いのですが…) タライから飛び出すカエルの勢いに驚いたり、ザリガニに触れると素早く後ろに跳ねるように下がり水が飛び散る様子に目を丸くしたりしていました。毎日、生き物と直接触れ合えるようにと続けてきたところ、初めはおたまなどの道具を介してしか触れなかった姿から徐々に素手で触れるようになり、不思議と「かわいい」と感じるようになってきました。その頃から、図鑑でザリガニのオスとメスの違いを見比べたり、脱皮の前と後の色の違いに気付いたり、カエルの餌について調べたりするようになりました。このように「知りたい」という内発的な動機付けにより、生き物の生態が少しだけ分かるようになったことで、チョウは強く触ると鱗粉が取れて飛べなくなってしまうという理由を考えるようになりました。ダンゴムシが死んでいるのを見て、「湿り気が足りなかったんだ」と反省する姿が見られるようになりました。そして、6月には、「生き物の飼い方やさん」が始まりました。子どもの興味の深さには、個人差があるため、こうして興味が深まった子どもが、周りの子どもにも新しい刺激を与えてくれる姿は幼稚園の良さなんだなあと思います。



子どもにとって自然との関わりは様々な学びがあります。生き物も十分に触れ合う中で、「今ここにいるこの生き物」に対する愛着や心を寄せる思いが生まれ、その先に「大切にしよう」とする気持ちが育まれるのではないかと思います。そのため私たち教師は、子どもが何を楽しみ、何に心動かされているのかを丁寧に読み取り、子どもが生き物に心を寄せる過程を丁寧に紡いでいきたいと思っています。それまでは、大人が飼育を肩代わりしたり、時には、死んでしまった現実に対して「どうして死んでしまったんだろう？」



と考える機会をもったりすることが必要だと思います。また、死んでしまった生き物のとむらいをすることも、儀式的ではありますが、子どもたちが何かしら感じてくれているのではないかと思います。

そうしながら育った子どもたちは、5歳児になるころには、生き物を身近に感じ心を寄せ、「大切にしよう」と飼育したり、どうしようもない自然の摂理(カマキリが産卵後に死んでしまうなど)に立ち会ったとき、個々に心を動かされ、「命」について感じたり、考えたりするのではないかと思います。

《7月の保育について》

【3歳児】

- 先生や友達と一緒に思いきり水の感触を楽しむ。
- 先生や友達に自分なりの表現で思いを伝えようとする。



【4歳児】

- 友達に自分の思いを言葉や身振りで伝えて遊ぶ。
- 友達や先生と一緒に水の感触を体全体で楽しむ。

【5歳児】

- 自分の思いや考えを伝えながら、友達の思いも知ろうとする。
- 自分なりの目標をもち、工夫したり、試したりして遊びを進めることを楽しむ。

大変暑い中、プール参観ありがとうございます。

今年度は、梅雨が長引き気持ちよくプールに入れる日が少ないのが残念です。

曇りでも蒸し暑い日には、足をバタバタさせたり、肩まで浸かったりして水の感触をたっぷり味わい、堪能しています。この頃は、浮き島に乗ったり、ワニ歩きをしたり、泳ぐ真似をしたり、ちょっとだけ顔を付けたりして水遊びに慣れてきた様子も見られるようになっていきます。3歳児こあら組の子どもも、大きいプールに入れることを楽しみにし、自分でプールの準備をしようとする姿が育ってきています。

